

アンダーグラウンド・ゼロ

アンダーグラウンド・ゼロ

鬼灯(ほおずき):
黒百合(くろゆり):
柘榴(ざくろ):
菖蒲(あやめ):
竜胆(りんどう):
七竈(ななかまど):

第一幕 一場 狼煙

柘: ふーん、また今日も削除対象は「感情過多」と「倫理不整合」ばかり。人間ってホント学ばないよねえ？

黒: TRUE SCORE(トゥールスコア)の変動、昨日より11%上昇。MECHIEL-β(メキエルベータ)が本気で記録の整合性を強めにきてるわね。

鬼: (目を瞑ったまま)...ああ。そろそろ本物に手を出すやろ。

柘: 本物って、あの子供の記録のこと？え～。面倒臭そ～。

鬼:ええから。お前ら下がるとき。今日はお客様が見えとる。

黒: あら珍しい。鬼灯がそう言うなら...引きましょつか、柘榴？

柘: ま、いっか。あたしナイフ磨いてくるから～。

(黒百合、柘榴ははける)

鬼: ...覗き見が趣味か？竜胆。

竜: ...久し振りだな、鬼灯。姿を現すつもりは無かったのだが。でも、お前が気付いたなら仕方がない。

鬼: ははッ。そりゃ10年組んだ相棒の気配くらい、忘れへんて。

竜: 単刀直入に聞く。「あの記録」に手を出すつもりか？

鬼: ...それが本題か？それとも...ただ懐かしくなったんか？

竜: 懐かしさを理由にお前に話しに来られる程、俺は器用ではない。

鬼: そーか。ならはっきり言うたるわ。あの「子供の記録」、僕が潰す。記録に残る資格が無い人間や。

竜: 違う。あの子は、俺達が救った命だ。お前が守りたいと思った唯一の存在だろう？

鬼: それは過去の話や、竜胆。過去は偽れるけどな、未来は誤魔化せへん。

竜:お前は、本気で全部壊すつもりか。

鬼: 僕はな、あの子の記録が希望として祀られることの方が...耐えられへんのや。

竜: ...お前が、まだ自分に嘘をつける内は、俺は立ち塞がる。

鬼: 好きにせえよ。けど、今度は手加減せん。

(竜胆ははける。黒百合、柘榴が鬼灯の元へ)

鬼: 次のターゲットは、ゼロ地点に保管されている記録。あの子の真実がある。潰すぞ。

黒: 了解。潜入ルート確保済み。後は、鬼灯のタイミングで。

柘: いよいよ見世物ってことね？壊すなら派手にいこうよ、鬼灯？

鬼: ...そうやな。僕達、DESPAIR(デイスペア)の祭りの始まりや。

(鬼灯、黒百合、柘榴ははける。菖蒲、七竈、竜胆が中央へ)

竜: あいつは動き出すだろう。...あの記録は、本当に危険だ。

菖: 止めるのね、彼らを。

竜: ああ。あの夜を、もう一度繰り返す訳にはいかない。

七: でも、何で壊したいのかなあ、鬼灯さん。優しい人だったのに。

竜:それを確かめるためにも、俺達が人間である意味を証明しなければならない。
菖:彼と相棒だったんでしょ。
竜:そうだ。「元」と言えども10年も組んでいれば、鬼灯の大体の行動は分かる。
七:凄い...良いなあ相棒って。
菖:中々興味深い話ね。詳しく聞きたいな。
竜:別に面白い話ではないが...。
七:僕も聞きたい！
竜:...やはり似ているな。従兄妹だからか。
菖:まあね。七竈の方が年下だよ。
七:菖蒲は僕の姉さんのような存在なんだ。
竜:そうか。...で、何が聞きたかった？
七:STELLA(ステラ)の話！
(竜胆は少しだけ顔を顰める)
竜:...懐かしいな。その名前は。
菖:竜胆と鬼灯さんが組んでいた時のコンビ名ね。私も好き。
七:このゼロ地区内で名前を知らない人なんていなかった。
竜:伝説のコンビと言われ...もてはやされた。正直うんざりしていた。
菖:人気者は辛いよね。竜胆が一番よく分かってるだろうけど。
七:でも任務成功率100%って話は有名だよな！
竜:...確かに、一度も失敗したことは無いな。
菖:どういう仕事をしていたの？
竜:...何でも屋のようなことをしていた。
七:本当に何でもやってたの？
竜:そうだな。市民の相談から、マフィアなどの裏社会が絡む命懸けの任務も請け負った。
菖:へえ...そんなに凄いコンビだったのに、何で解散したの？
竜:...価値観の相違だ。
七:喧嘩別れ？
菖:そんな恋人みたいな...。
竜:まあそんなところだ。
七:10年も組んでたのに合わなかったの？
竜:いや、合っていなかった訳ではない。むしろ最高だった。
菖:...解散した時、何を思った？
竜:...喪失感が激しく襲ってきた。当たり前隣にいたはずの奴が忽然と消えるんだ。正直苦しかった。...何であんないい奴を無くしたんだろうとな。
七:...そっか。
菖:そろそろ刻限ね。動きましょうか。
竜:ああ。

第一幕 二場 理性と言葉の戦い

竜:鬼灯は「子供の記録」を潰すと言っていた。
七:ゼロ地点に保管？されてるんだよね。
竜:そうだ。
菖:...相当な危険を犯すつもりよね。
竜:ああ。俺達はある組織に潜入しなければならないだろう。
七:その「子供の記録」はどこにあるの？
竜:ゼロ地点といってもその深淵。「神選評議機関」の最奥だ。
菖:...あの世界大戦後、MECHIEL-βを作って世界を統治している組織....

七: てか、そもそもMECHIEL-βって何なのさ？

竜: MECHIEL-βとは「人間の理想と倫理を評価し、再構築する機械体」だ。正式名称は「Machine(マシン)....」。

七: (遮るように)もういいもういい！よく分かんない！

竜: TRUE SCOREもMECHIEL-βに含まれるものだ。

菖: まあつまり、嘘を数値化するのよ。

竜: 神選評議機関は「真実のみの世界を実現する」というスローガンのもと、嘘をついた人間を徹底的に排除しようとした。

七:

竜: 嘘の内容、回数など、条件は沢山あるのだが。

菖: 最終的には...

七: 神選評議機関に消されるんだっけ。

菖: だから嘘はご法度。

竜: 鬼灯は自分で「嘘は嫌いだけど好き」などと支離滅裂なことを言っていた。

菖: 確か神選評議機関が有益だと判断した嘘は、TRUE SCOREも減点されないんだよね？

竜: その通りだ。

七: そうなの？知らなかった。

菖: つまり鬼灯さんは...

竜: そうだ。あいつは、MECHIEL-βを上手くすり抜ける嘘をつくんだ。

七: ...ちょっと、厄介な人だね....

竜: そうだな。嫌な程知っている。

菖: 本当に何でも知ってるんだね。

竜: ああ。あいつは寝相も悪いし、酔えば抱きついてくる...更には寝る前に毎回俺に....

菖: あ.....あの....

七: えと...どういう...？

竜: 何か変なことを言ったか？

菖: ま、まあいいや。竜胆が鬼灯さんのことをよく知ってるのが十分伝わってきたし.....

竜: それは良かった。

七: ...竜胆ってズレてるなあ....

菖: (七竈を軽く殴る)

七: 酷い！僕のこと殴ったあ！痛い！

竜: ズレているなんて、今更分かったことを言うんじゃない。少なくとも、こんな仕事をしている時点でズレている自覚はある。

菖: そ.....そっか。で、何の話してたんだっけ。

竜: そうだったな。「子供の記録」がある神選評議機関に向かうという話をしていた。

七: とにかく場所と、その子供の記録の詳細を探そうよ！

菖: 七竈の言う通りね。私、一人でその場所を視察しに行くから。

竜: (菖蒲の腕を掴み)危ないぞ。

七: そうだよ菖蒲！一人で行動して...もし襲われちゃったら....

菖: 大丈夫だよ。こう見えても私、結構腕立つんだから。

竜: ...信じていいのか？

菖: うん。任せて。

(袖にはけていく菖蒲。遠ざかる菖蒲に向かって七竈は腕を伸ばして掴もうとするが空振る)

七:

竜: 七竈？

七: ...イヤな予感がする。

竜: ...分かるか。

七: うん。それが僕の強み。

竜: ああ。知っている。

七:(震え)

竜: 大丈夫か？

七: ...ああ...駄目だ。

竜: 駄目？

七:接触する。

(暗転。ホリは青。装置はパソコンと2枚のパネル)

菖:ここね。旧都市の地下。神選評議機関のデータ保管所....

(ノイズが混じった電子音が鳴る)

菖: ...？パソコン？

(パソコンに近寄る)

菖: ！古いデータね...けれどまだ生きてる。これなら鍵を....

(警告音が鳴る)

菖: っ？！

黒: 獲物がかったわね。

菖: ...あなたは...

黒: あら、LUMINOUS(ルミナス)の優等生さん。そんなに記録が欲しいの？それとも...誰かを救いたいのかしら。

菖: ...どうして、あなたがここに。

黒: 理由なんて簡単。あなたと同じ。ただし私は...壊すために来たの。

菖: 黒百合...壊して、何になるの？誰かを苦しめるために？

黒: ええ、それが楽しいの。だって人間って、苦しむ時ほど正直になるんだもの。私は、その苦悶に悶えて喘ぎ苦しむ...そんな表情が大好きなの。

菖: あなたは...それで満たされるの？

黒: ...満たされないから、してるのよ。

(黒百合は耳に通信機を装着する)

黒: そう...壊す。これだけ、これだけでいいの。

(黒百合はパネルに手をかざす。ホリが赤へ)

黒: アクセス完了。さあ、どこまで持つかしら？

菖:簡単には、壊させない。

黒:ここね。

(起動音)

黒: 第一防壁、突破。...次はどうするの？

(菖蒲はもう1つのパネルに手をかざす)

菖: だったら、次の層を強化するだけ。

(ホリを再び青へ。断絶的なノイズ)

黒: これ以上は持たないわ。さあ...壊れて。

菖: ...データが、侵食してくる....

黒: あら？少し力を入れ過ぎたかしら。か弱い子猫ちゃんには手加減してあげるべきだったわね？菖蒲ちゃん？

菖: ...いいえ。あなたが思うよりも...私は強い。

(ピー、という音)

黒:。

菖:。

黒: ...どうやら、私達がハッキングしていた情報同士がぶつかってショートしたみたいね。

菖: ...引き分け、か。

黒: (少し諦めたように)...そうね。今回は引き分け。次は...嘘じゃない勝負をしましょう？

(黒百合ははける)

菖: ...まだ守れる。きっと。
(菖蒲ははける。七竈が中央へ)

第二幕 一場 毘と素直

七: ここ...久々に来たなあ...公園、なんだよね。変わったなあ...瓦礫だらけだし。
(何かを探している)

七: えっと、これで合ってるのかな...菖蒲、見つけられるといいんだけど...。
(小さな端末を拾い上げる)

七: 何だろコレ...。
(カチリ、という音)

七: あ。

柘: あっははっ！まんまと引っかかったねえ！

七: あ...これ、毘？ごめんなさい、気付かなくて...。

柘: ...ふっ、くくっ、あはははっ、ははっ！

七: ん...？

柘: 謝るって...ほんと君変わってるね！普通は怒るところなのに！

七: ...だって、怒っても仕掛けが消える訳じゃないでしょ？

柘: あー、そういう理論？でもさあ、君らって希望だの救済だの言ってるけど、結局は...壊すあたし達の後始末でしょ？

(七竈は柘榴の目の前まで歩く)

柘: っ！

七: ...うん、そうかも。でも...壊すだけじゃ、きっと足りないんだよね？

柘: ...ねえ、君さ。何でそんなに信じられるの？...世界が壊れて、嘘と憎しみに塗れてるのにさ。

七: 「信じたい」じゃなくて...「信じる」んだ。人間って矛盾してるから...でも、その矛盾が無くちゃ...きっと壊れたまんまだよ。

(柘榴は七竈の手から端末を奪い取り、画面を操作する)

七: ...？もしかして、解除してくれて...。

柘: 今回は...見逃してあげる。でも次は、もう少し楽しく壊してあげるからさ。

七: ...うん。じゃあ、その時まで生きていようね。

(柘榴ははける)

七:はあああ...騒がしい人だったあ...。

七: ...やっぱり皆んな...どこかでちゃんと笑いたいのだろうなあ...。

(竜胆が七竈のもとへ)

竜: 七竈、ここにいたか。

七: あれ？竜胆？どうしたの？そんな顔して...。

竜: ...菖蒲が、戻って来ない。

七:え？...連絡は、DESPAIRの黒百合さんとハッキングし合ってたのが最後...？

竜: 終了後、通信が途絶えた。あの菖蒲が...何も言わずに。

七: じゃあ...まだ向こうに...。

竜: ！

七: 行かなくちゃ...菖蒲...菖蒲...。

竜: 七竈、落ち着け。感情的になれば、相手の思う壺だ。

七: でも、でも...菖蒲、一人で...！

竜: 七竈！

七: っ。

竜: ...俺も、不安だ。だが...だからこそ、動かなければならない。

七: うん...探そう。絶対見つけよう。

竜: ああ。菖蒲だけじゃない。...この世界の答えもな。

(中央に菖蒲)

菖: ...あれ。私、迷ったのかな...

七(声): ねえ菖蒲...大丈夫?

竜(声): お前はいつも無茶をする。

菖: ...七竈...竜胆...

鬼(声): 希望ってのは、壊れるためにあるんやろ?

菖: 違う! ...そんな言葉、聞きたくない...

柘(声): 君は本当に優しい? 誰かを守りたいって言いながら、怖がってるだけじゃない?

菖: 私は...怖いよ。でも...守らなくちゃいけないものがある...!

(間)

七(声): 菖蒲! 聞こえる?

竜(声): しっかりしろ。俺達はここにいる。

菖: ! ...これは...本当。本物の二人の声...でも、来ちゃ駄目...あれが来る...!

(鬼灯、黒百合、柘榴が菖蒲のもとへ)

鬼: んー... やっぱ希望の象徴は、苦しんでる顔が一番美味しいなあ...

柘: あははっ。助けて欲しいって顔してるねえ~!

黒: 必死になればなる程、心は脆くなる。あなたは...どこまで耐えられるかしら。

菖: ...何を...

柘: コイツが潰れたら、次はあのお子ちゃまと澄まし顔のおに一さん? 絶対泣かせたい~!

黒: 焦らないの。壊すのは一瞬でできるけど...苦しめるには、過程が必要なのよ。

鬼: ...黒百合も悪趣味やなあ...でもまあ、僕も嫌いじゃないで。

黒: このコを囚えたまま...LUMINOUSをおびき寄せる。このコを救いたいなら、必ず飛び込んで来るでしょう?

鬼: まあ、真っ直ぐな奴らやしな。特にあいつは...な。

柘: じゃあさ! 七竈と竜胆が来たらどうする? あたしが遊んでいい?

黒: ...柘榴。あなたにしかできない揺さぶりをかけてあげなさい。

柘: やったあ!

鬼: ...ただな、僕が欲しいんは勝ち負けちゃう。人間の矛盾が暴かれて.....最後に笑える瞬間が欲しいんや。

黒: ...やっぱ、あなたって残酷ね。

柘: いいじゃん、楽しいんだから!

鬼: ...さあ、宴の始まりや。

(暗転。ホリは青)

七: 発信元には結構近付いたはずなんだけど...

竜: 妨害電波が邪魔だ。

七: うん、多すぎて全部防ぎきれないよ。

竜: アンテナを追加して電波を拾うか...

七: そうだね...って...ここは?

竜: ...成程。俺達は旧都市に誘い込まれたようだ。

七: えっ? 旧都市?

竜: 世界大戦時、ここは官邸だった。

七: かんてい?

竜: 首相官邸のことだ。

七: ええ、昔は首相さんがいたんだねえ。

竜: らしいな。まあ、それが今は神選評議機関になった訳だが。

七: 爆撃で全部吹き飛ばしちゃったんだね。

竜:…一説では名前が出ていなかっただけで、神選評議機関はずっと前から存在していたという話がある。

七:え？ずっと前から？

竜:戦後のこの国を統治すべく現れた英雄を装うためか…あの世界大戦は、神選評議機関がトリガーになったという噂が立っている程だ。

七:なーんか不気味…。

竜:真偽は謎だがな。

七:そうなん…。

竜:っ！

(竜胆は七竈の口を塞ぐ)

七:ん！

竜:静かにしろ。隠れるぞ。

七:ん…？

第二幕 二場 策略と蜘蛛の糸

(竜胆は七竈を連れて影に隠れる)

鬼:な？探偵みたいやろ？

黒:まるで名探偵ね。

鬼:それを言うなら超探偵や。

黒:ご勝手に。

鬼:ここ周辺にいる気がするわ。

黒:それは否定しない。

(鬼灯は端末を掲げ、画面を押す動き。直後にピピ、と鳴る)

鬼:なあ黒百合？

黒:ゲームセットね。

鬼:…んん？何や、後ろの方で音が聞こえるな？

黒:今の音は私達じゃないものね？

鬼:まあええか。菖蒲は柘榴に任せてあるしな。僕達は心置きなくあいつらを探せる。

黒:そうね。

鬼:ところで、柘榴と繋いであるか？

黒:勿論よ。

柘(声):ほらほら！吐いちゃえば楽になるのにさ～？本っ当に馬鹿だねえ？あははっ！

菖(声):っ…………。

鬼:柘榴、そのまま痛めつけてくれ。

柘(声):はい！

竜:……。

(竜胆が鬼灯と黒百合の前に出てくる)

黒:あらあら…自分から出て来るなんて…。

鬼:……竜胆。

黒:ここからは、鬼灯一人でいいんじゃない？

鬼:…せやな。後で合流するわ。

(黒百合ははける)

鬼:…さて、待たせたな。

竜:問題は無い。気にするな。

鬼:変わらず優しいなあ竜胆は。

竜:……知るか。

鬼:やっぱ変わらんなあ…その目、あの頃のままだ。

竜:...懐かしむために来た訳ではない。

(鬼灯が一步近付き、竜胆の頬に触れようと手を伸ばす。しかし、ほんの数センチ手前で止める)

鬼:...触れたら、壊れてしまいそうでな。

竜:.....。

(ここから鬼灯はわざと軽口で喋り始める)

鬼:で? 何しに来たんや? まさか「菖蒲を返せ」とかベタなこと言うんちゃうやろな?

竜:ああ。その通りだ。...だがもう一つ。お前が本当に望んでいるものを聞きたい。

鬼:本当に望んでるもん...? んなもん、僕自身が一番分からんわ。

竜:...嘘だな。お前は今も、あの頃を捨て切れていない。

鬼:...ホンマに狡い男やな。そんなこと言われたら...揺らいでまうやろ。

竜:揺らいでいる内は、まだ間に合う。

鬼:せやったら...僕を止めてみい。その嘘、最後まで信じさせてみろよ。

竜:未練を抱えるなら尚更。これ以上、過ちを重ねるべきではない。

鬼:...未練? 違うで。これは執着や。僕は僕のやり方で...この世界に爪痕を残すだけや。

竜:...お前らのやり方で? 破壊と嘘の連鎖でしか、自分を証明できないのか?

鬼:せやな。僕らは嘘で繋がれた。真実なんか、信じたことあらへん。...でもな竜胆。お前だけは、違ったんや。

竜:.....今も、変わらない。

鬼:なら何でや? 何で僕から離れた? ...僕らが堕ちるんが怖かったんか? それとも...正義を気取っただけか?

竜:...怖かったのは、お前が壊れていくのを見ていること。それをただ見ている自分が...

鬼:...そんな言葉、今更聞かされても困るわ。僕はもう、戻らん...戻れへん。

竜:本当か? あの日々を捨てたなんて、お前の目は言っていない。

鬼:...はは。ホンマに...狡い男やお前は。覚えとるで? あの頃、お前が笑ってた顔。あの時だけは、僕も...嘘をつかんで。

竜:...今は。

鬼:違う。今の僕は...DESPAIRのリーダーや。嘘をつくことでしか、生きられへん。

竜:なら...この会話も嘘なのか?

鬼:さあな。信じるかはお前次第や。

竜:...お前の嘘は、もう聞き飽きた。

鬼:お前の正義感にも胸焼けしそうやわ。

(間)

竜:...それでも、俺は信じている。お前が最後に選ぶのは、本当の自分だと。

鬼:.....賭けるんか? そんなもんに。

竜:賭ける。STELLAの頃のお前に、今も。

鬼:ほな勝負や。お前の希望か、僕の嘘が勝つか。

竜:.....。

鬼:...でも.....。

(間)

竜:...鬼灯。

鬼:(泣きそうな声で)...呼ばんといて。今それ聞いたら...崩れてまう。

竜:....。

(再び竜胆の前に歩いて行き)

鬼:...僕...嘘ばかりついてきた。本当のことなんて...一つも言えへんかった。けどな...お前がいたあの頃だけは...

(言葉が途切れ、鬼灯は竜胆の胸元に手を伸ばし、そのまま縋りつくように握りしめる)

鬼:あの時だけは...僕も本当に...生きてる気がしたんや...

(鬼灯は小さくすすり泣く。竜胆は鬼灯の頭を撫でようとするが止める。手が空中で止まっている)

鬼:もう.....戻られへんって...分かってんのに。...まだ.....お前に....

竜:...戻るかどうかは、お前が決めることだ。俺は.....待っている。嘘で塗り固めたお前自身を、解いてくれるその日まで。

(竜胆ははける)

鬼:.....お前のこと...好きだけど、キライや。...希望なんて、見せんでいいのに。

(暗転)

第三幕 一場 輝きの残滓

鬼:僕ら、案外ええコンビやん？

竜:...ああ。お前の嘘と俺の計算が揃えばな。

鬼:んなもん無敵やん！

竜:そうだな。

鬼:なあ、コンビ名どーする？

竜:ん.....。

鬼:僕、竜胆に決めて貰いたいんや。

竜:じゃあ.....STELLAはどうだ。

鬼:すてら...STELLAか。お星様っちゅ一意味やな？きらきらしてて綺麗やん。

竜:「闇に光る星のように、どんな状況でも輝きを見せたい」。

鬼:わ、意味まで完璧やん。よっしゃ決まりや！僕らはSTELLA！最強で最高のコンビや！

竜:.....ああ。

鬼:これから宜しゅうな、相棒。

竜:...頼んだ、相棒。

鬼:竜胆と組み、STELLAと名付けて貰った時は、この上ない喜びを感じた。これから始まる二人での人生が、何よりも輝いて見えた。

鬼:見てみい、竜胆。下で動き回ってる奴ら...みーんな僕らの仕掛けた舞台の上や。

竜:滑稽だな。...だが罪悪感は？

鬼:無いな。僕らがやってんのは生き残るためや。それに...おもしろいやろ？

竜:ふ.....。

鬼:それが見たかった。

鬼:こん時は人生の絶頂期やったな。何をするにも竜胆と一緒に。楽しいことこの上無かったわ。でも.....やっぱり、僕が間違えたんやろなあ....

鬼:ターゲットは一人。ガードも緩い。嘘一つで懐に入れるわ。後は僕が処理したら終いや。お手軽で助かるなあ？

竜:...処理、か。つまりは...命を奪うと？

鬼:竜胆、今更やろ？僕らがやってる仕事、綺麗事やあらへん。

竜:.....そうだな。

鬼:あの頃はどんな仕事でも引き受けてたなあ。

竜:おい鬼灯。最近の任務内容、あれは何だ？直接的なものが増えてきたじゃないか。

鬼:何や竜胆。稼げるしスリルあって最高やろ？

竜:...俺達は、ただ光になりたかっただけ。闇を濃くするために存在している訳じゃない。

鬼:何言うてんねん竜胆。光は闇があって初めてその輝きに気付くんやで？

鬼:ここからだ。互いにすれ違うようになったのは。

鬼:ターゲットの顔、最期まで笑ってたで！...僕が嘘で安心させたんや。最高やろ？

竜:...それを誇りに思えるのか？

鬼:誇り？そんなんちゃう。僕はただ...生きとる実感が欲しいだけや。

鬼:その度に毎回「やってしもた」って反省するんやけど...な。無理やった。もう戻れない場所まで来てしまった。

鬼:なあ...僕ら、何目指しとるんやっけ。

竜:.....星、だった。闇を照らす...小さくても、確かに輝く星。

鬼:.....あの頃の竜胆は、何を考えとったんやろな。ただの相棒...ただの星として隣におったんか。それとも...もっと違う何かを見つめてたんやろか....

(短く息を吐き、皮肉げに笑う)

鬼:僕は...阿呆や。こんな腐った世界で...あいつのことが「好き」なんて、信じるもんやあらへんの。僕は、何に縋って...捨てたはずなのに...忘れられへん。あの光景も、声も、体温も...戻らへんのに。菖蒲を救いに来た...それは正義感どうこうじゃなく、本心やろな。...止める気にもならんわ....

(鬼灯は竜胆とは反対の方向にはける)

七:もおっ！何でそんなに追いかけて来るのさっ！？

黒:楽しいからよ。それに君、可愛いし。

七:可愛くないよ！

黒:論点絶対ズレてるでしょ。

七:もうやめてよ！

黒:やめないわよ。菖蒲ちゃんは柘榴に任せてるし、竜胆くんは頼れる名探偵さんに....

七:え？鬼灯さんのことだよな？

黒:...？そうよ。

七:鬼灯さんならさっき....

鬼:黒百合。

黒:...鬼灯？何故ここにいるの？

鬼:...またや。

七:何が...？

鬼:また、失敗してもうた。

黒:何、言ってるの？

鬼:黒百合、分かったんや。

黒:え？

鬼:確かに、DESPAIRとLUMINOUSのやり方は全くの正反対や。でも分かるか？目的はどっちも一緒のところにある。

七:目的...？

鬼:そうや。じゃあ七竈君、問題や。ここで言う「目的」は何やと思う？

七:...「子供の記録」を探し出す？

鬼:御名答。

黒:まさか、協力するって言うの？

鬼:そのまさかだと言ったら...抵抗するか？

柘:目的を達成するためなら、あたしはぜーんぜん構わないよ！

七:君っ！菖蒲はどうしたんだ！

柘:あの子？今は竜胆君と二人でいるよ～。
七:え...二人で？君が菖蒲のことを...。
柘:あーそれ？あれは演技だよー。
七:え？演技？待って、着いて行けない。
鬼:君達LUMINOUSの目的が、僕らと合致しているのは薄々気付いていたからな。
黒:柘榴と通信を繋いでおいたのは...。
鬼:黒百合の言う通りや。僕は竜胆と、そして黒百合は七竜君と話す時間を作るためや。
七:...はわ.....。
鬼:心配掛けて済まなかったなあ。
七:...ちょっと柘榴ちゃんのこと嫌いになりかけたけど...そういうことなら大丈夫だよお。こっちも無理矢理突っかかろうとしてごめんねえ。
柘:いーのいーの。菖蒲ちゃんは無事だし、何もしてないよ～。
鬼:でも、謝らせてくれ。柘榴が菖蒲に何もしていないというだけや。菖蒲のことをあのデータ保管所に引き留めて、尋問したのは本当や...すまん。
七:僕に謝ったって何にも変わらないでしょ？言うなら菖蒲に、だね。
黒:...あなた達、従姉弟らしいわね。
七:うん！そうだよ！僕の何よりも大切な宝物！大好きなんだっ！
鬼:...君が羨ましいわ。そんな正直に「好き」言えるんは、君の強みやな。
柘:そうだね...さ、整理しようか。今あたし達がやるべき事は、あの「子供の記録」を見つけ出すこと。
鬼:そうやな。まずはあの二人に合流しようか。

第三幕 二場 失われた子の黙示録

(菖蒲と竜胆が合流)

菖:そっちから来なくても大丈夫。
七:菖蒲！
菖:データ自体は生きてる。
黒:そうね。でも肝心の記録は見つからなかったわ。
鬼:そうか...。
柘:だったらもう、神選評議機関に直接乗り込んじゃおうよ！
菖:ちょっと、本気？
柘:だってそうでもしないと無理でしょ～？
鬼:僕らがあの「子供の記録」を見つけ守りたい理由。はっきり言えるか？
菖:...MECHIEL-βの「人間審査」まで残り数日...それまでに見つけて取り返さないと...。
鬼:正解や。
竜:あの記録は過去に、鬼灯と俺が守り、救った子供の記録だ。
鬼:...そもそもな。ここで言う記録っちゅうのは、「遺伝子データ」「行動ログ」「心理データ」「思考アルゴリズム」などの情報が保存されたもののことを指す。まあムズい話やから、ここら辺はあんまり気にせんくてもいい。
柘:君、こーゆーの苦手そうだね～。
七:...当たってる。
鬼:はは。それが普通やな。んじゃあ本題。その子供はな？あの第X次世界大戦の前夜に生まれ、戦争を終わらせる鍵として神選評議機関に極秘に研究されてた子やったんや。
菖:...普通の子じゃないの？
黒:そのようね。何の変哲もない子なんでしょうけれど、神選評議機関にとっては、人類の生存の鍵を握る子供っていうことだからね。

竜:戦争終結のために作られた子だ。人間の矛盾を理解し、全員を納得させる決断を下せる存在。

七:その子自体が何かするとかではなく…?

竜:そうなる。神選評議機関はその子供を依代にしていた、とも言える。

鬼:言い方上手いなあ。多分そっちの方が正しいわな。

竜:しかし、同時期に開発が進められていたMECHIEL-βが完成して世界を統治したことにより、戦争は無理矢理終結させられた。

柊:じゃあその子は使われることなく封印されちゃって、存在すら誰にも知られなかったって訳? 笑えないね。

竜:他の人間とは違う目的を置いて研究された子。それ故なのか、通常とは少し違う記録のされ方をしていた。

鬼:その記録には、子供の過去の記憶だけでなく、選択肢ごとに分岐する可能性の未来まで保存されていたんや。

七:つまり…記録が何個かあるってこと?

竜:そうだ。誰がその記録を開くかによって、未来は大きく変わるという訳だ。

鬼:噂では、開いた瞬間にその子供の意識が閲覧者の脳に侵食してくるらしいで。

柊:マジ? ……参ったねそりゃあ。

黒:でも、行かないことには始まらないわ。

竜:場所はここから半径二キロメートル以内に位置している。

鬼:ほんなら、行こか。

竜:…ああ。

柊:黒百合、行こっ!

黒:あつ、ちょっ、待ちなさい!

(柊榴は走り、それを追いかけてはける黒百合)

七:ねえ、ちょつと的外れなこと聞いてもいい?

鬼:何や?

七:「子供の記録」が神選評議機関に利用されるとまずいってことは十分分かったんだけど…利用されると何が悪いの?

(鬼灯と竜胆は顔を見合わせる)

竜:…俺が考えた可能性は三つ。

鬼:僕もや。

竜:一つ。かつては封印された「完全な統治者」になり得る可能性。きっと神選評議機関はその子供の記録から「人間らしい感情」や「自由な意思」を削ぎ落とし、ただの秩序維持の道具として使うだろう。

鬼:二つ。未来を一つに固定してしまう可能性。さっき、記録にはいくつかの未来が入ってる的な話をしたやろ。これを利用されれば、「最も統治に適した未来」だけを選び、他の可能性を全て消去するはずや。

竜:そうなれば世界は予定調和の箱庭と化し、偶然や奇跡、感情的な選択は存在できなくなることになる。

菖:で……最後は?

竜:三つ。人間が神を装う可能性。あの子の記録を使い、人間の在り方さえも決定する。これは事実上「人間が人間でなくなる」行為であり、自由意志を奪う究極の暴挙に等しい。

七:……こんな難しい話だけど、一つ分かったことあるよ。

竜:それは何だ?

七:どの可能性も、ロクでもないものだってこと。

鬼:……そうやな。

菖:…さ、私達も行かなくちゃ。

(菖蒲、七竈、竜胆、鬼灯もはける。暗転。柊榴と黒百合が中央へ)

柘:うわー...何かひんやりしてる...。
(続いて柘榴、黒百合以外も歩いて来る)
菖:.....次の角を曲がれば、保管室に通じるはず。
黒:センサーの反応は？
菖:今のところは静かね。
柘:...な一んかわくわくしてきたなあ。
七:うう...怖い怖い...。
(七竈は鬼灯の袖を掴む)
鬼:うおわっ！びっくりしたわ。
竜:おい、見ろ。
鬼:何や...あれ。
(奥に落ちているパネルを拾う)
黒:このシステム、突破できるわ。けど...警報が鳴る可能性...三割。
七:高くない...？
柘:三割なら上等じゃん。あたしが残りの七割を運でカバーしてあげるよ。
七:え、運...？
(鬼灯はパネルの画面に触れようとする)
竜:待て、鬼灯。今お前が触れたら危険だ。
鬼:危険なんは...最初っから決まりきってたことやろ。
(間)
柘:ねえ、失敗したらどーする？
黒:んー...その時は...あなたを置いて行こうかしら。
柘:あはは。それ最高。
菖:...私が押す。黒百合はできる限り抑え込んでいて欲しい。
黒:勿論よ。任せて頂戴。
(菖蒲はパネルに触れる。ピピ、と鳴る)
黒:...成功ね。
七:やったあ！
鬼:さ、本番はここからやな。

第四幕 一場 守るべきもの

黒:パネルの画面が変わった。
菖:本当ね。
竜:見せてくれるか。
(パネルを竜胆に手渡す)
竜:...。
鬼:(覗き込み)...どうや？
竜:.....これか。
鬼:...そうみたいやな。
七:見つけた？
鬼:ああ。間違いない。このデータはあの子のものや。
柘:遂に辿り着いたんだね！
竜:後は...この記録を神選評議機関のサーバーから抜き出し、消すだけだ。
菖:消すことができれば...全てが終わる。
黒:そう。MECHIEL-βも、神選評議機関も。
鬼:とんだ下剋上やな。
竜:クーデターとも言える。

鬼:縁起の悪いこっちゃ。

菖:これをパネルに近付ければ、データを手に入れられる。

柘:さあ、さっさとやっちゃって。

菖:ええ。

(菖蒲はカードのようなものをパネルに近付ける)

鬼:.....時間かかるな.....。

(ピー、と鳴る)

菖:...終わった。これで...お終い。

七:できた?できた?

菖:うん。

鬼:...おおきに、菖蒲。

竜:ありがとう。

菖:いいえ.....うっ?!

(菖蒲は持っていたパネルを落とす)

柘:え、どうしたの?

菖:.....電気が流れた....。

黒:電気?.....え?

(黒百合はパネルを拾い上げ、画面を見る)

黒:.....「神選評議機関の防衛反応。記録の未来を消去します」...?

竜:は?

鬼:消去やと?

(黒百合はパネルを机に置き直す)

七:そんな.....。

菖:二人が言っていたことが今、現実になろうとしている...!

竜:ああ。

鬼:...決着を着けよか。

七:決着?

鬼:悪いがお前ら。外で待っとけ。ここから先は...僕と竜胆でやる。

黒:...平気なの?二人だけで?

竜:心配しなくても平気だ。俺達は...相棒だからな。

鬼:!(表情が緩む)

竜:.....そうだろう?...相棒。

鬼:...うん、そうやな。心配すんな。これは...僕ら二人のケリをつける時なんや。

菖:...分かったわ。

柘:必ず、戻って来てね。

(鬼灯、竜胆以外ははける。間)

鬼:なあ...竜胆、僕の名前、呼んでくれへんか。

竜:.....鬼灯。

鬼:...僕は、幸せ者やな。

竜:...そうか。

鬼:...なあ、竜胆。最後に一回だけ...あの頃みたいに、組まへんか。

竜:.....勿論だ。

鬼:STELLA、一夜限りの復活や。

(鬼灯は握った手を竜胆の前に突き出す。竜胆も手を鬼灯と合わせる)

竜:では、最後の舞台を始めよう。嘘か真実。どちらをこの世界に残すか。

鬼:僕は、矛盾したまま生きられる未来がええ。正しさも、間違いも、笑って許せる.....そんな世界や。

竜:俺は、人間が『選ぶ』未来を残したい。例え、選択が過ちであっても。

鬼:...今なら竜胆の気持ち、よう分かる気がするわ...。

(ホリ明るく。そしてゆっくり元の色へ)

竜:.....「消去、失敗」...。

鬼:つまり...は。

竜:成功だ。未来は残された。

(鬼灯と竜胆は互いを見つめ、かすかに笑う)

鬼:.....竜胆。僕ら...やっぱり最高やな。

竜:お前とまた一緒にいられて...共に行動できて...良かった。

鬼:...終わったんやな。けど、何やろ。胸ん中、空っぽや。

竜:空(から)ではない。今は...そう見えるだけだ。俺達には...この選択で守った未来が、静かに眠っている。

鬼:相変わらず、綺麗事ばかりやな。でも、嫌いやない。

竜:鬼灯。お前はずっと、自分を偽り続けてきた。けれど、今だけは...そのままでいてくれないか。

鬼:.....そうやな。

竜:...ああ。

(鬼灯は竜胆と背中合わせになる)

鬼:ほんま、最後の最後に狡いよな、僕。

竜:鬼灯。お前は偽りを愛し、矛盾を抱えたまま生きる。それがお前の真実なのだろうな。

鬼:お前もや。冷静ぶって、全部割り切ってるフリして...ほんまは、めちゃくちゃ臆病なくせに。

竜:...人は、矛盾しているから、美しい。

鬼:せやな...それがこの世界唯一の真実か。

(鬼灯は独り言のように)

鬼:...結局、僕らは何を守ったんやろな。ただの『記録』か...それとも...あの子の未来か...それとも...僕ら自身の...まだ見ぬ明日か。ま、答えなんてどうでもええか...。

(鬼灯は懐から煙草を取り出す)

竜:また独り言か。

鬼:何や、聞いてたんか...。昔からやな。お前は、僕の隙間ばっか突いてくる。

竜:お前が今も嘘ばかりつくからだ。俺は、それを見抜きたいだけだ。

鬼:...相変わらずやな。けど、もうええ。今の僕は...ほんまに、楽や。

竜:...それなら、良かった。

(竜胆は鬼灯の許可を得ず、鬼灯の煙草の箱から一本取り出す)

鬼:...また、STELLA組むか？

竜:...はは。それも悪くないな。